

犯罪不安が喚起される要因

—— 犯罪種別の検討 ——

高島 翠・本間由利恵

1. はじめに

われわれが安心して毎日を生活するためには、その生活環境の安全性が必要となる。その安全対策の1つが、犯罪を防ぐことであろう。本柳(2011)によると、従来の犯罪対策の理論は、人が犯罪者となりそうな原因を明らかにし、その原因を取り除くことで防犯するという犯罪原因論とよばれるものであった。近年では、だれもが犯罪者になりうる可能性があり、罪を犯しうる機会を減らすことで防犯を試みるという犯罪機会論が唱えられるようになってきている。言い換えると、犯罪を起こそうと考えていた人がいたとしても、犯罪を起こしにくい状況・環境要因を創造することで、犯罪の抑止につなげられる。このような犯罪対策の2つの理論をもとに犯罪を防ぐための手法を考えると、不審者(犯罪の加害者になりそうな人物)から遠ざかることと、不安な場所(犯罪の多発しそうな環境)から遠ざかることの2つが挙げられる。どちらの方が犯罪を防ぐ手法として有効であろうか。子供に不審者に近づかないように教育することは難しい。なぜなら、見るからに怪しい人が犯罪者であるとは限らず、また、知人から被害を受ける場合もあるので、どのような人物が不審者なのかを見ただけから判断することができないためである。それに対して、犯罪の多発する環境から遠ざかることは容易である。どのような見だ目の環境において犯罪がおきやすいのかを明らかにすることは可能であり、さらに、そのような場所を避けて行動することも可能である。そのため、近年では犯罪原因論ではなく犯罪機会論に基づいた防犯対策が唱えられるようになってきたのである。

犯罪が起きやすい環境的要因を明らかにすることで、より安全な環境を作り出していくことにもつながる。防犯を意識することは、地域の安全な環境を作り出すだけでなく、コミュニティの活性にもなる。例えば犯罪の多い地域では、夜間の外出禁止など行動の制約が生じたり、コミュニティ内での交流が難しくなったりするが、安全・平和な地域では、コミュニティのメンバー間の交流や経済活動も活発になる。このように、犯罪は、直接的な被害をもたらすだけでなく、われわれが安心して生活することをも困難にしてしまう。

こうした犯罪に対する漠然とした不安は犯罪不安と呼ばれる。犯罪に対する不安は、人々の警戒心を生み出し、危険な場所や人を避けることで犯罪の被害者にならないように防犯意識を高める効果もあるが、われわれが安心して毎日を暮らしていくためには、不要な犯罪不安を減らしていく必要がある。犯罪不安は、社会情勢などによっても生じるが、上述のように環境要因によって生じるものも多い。これまで、どのような環境要因が犯罪不安を生み出すのかに関する研究が

多数行われていた。これらの研究を要約すると、犯罪不安を引き起こす環境の物理的特性として、①見通しの悪い空間、②犯罪者の隠れることができる空間、③犯罪者から逃れることのできない空間、④人気がなく助けを求められない空間、⑤暗く影になっている空間、⑥荒廃している空間、⑦昼間よりも夜間の時間帯、などが挙げられる。見通しの悪い空間や暗い空間などのように人の目が届かない場所では、助けを求めることができないだけでなく、犯罪者の存在や犯罪そのものを隠すことにつながる。そのため、犯罪に巻き込まれる不安を喚起する。また、割れた窓やごみの不法投棄、落書きなどが放置された荒廃している空間は、その地域住民から見放され、ホームレスや犯罪者などがたむろしている印象があり、犯罪に巻き込まれる不安を感じる人々が多い。割れている窓が放置されると、住民の監視性の低さと住民のその地域に対する愛着の低下を示し、更なるごみの不法投棄や犯罪の多発を誘発する。このような現象は割れ窓問題として指摘されている(ケリング・コールズ, 2004)。

環境要因以外の犯罪不安の喚起要因として、性別が挙げられる。欧米では1960年代頃から、女性や高齢者、低階級の人々が犯罪被害のリスクを感じやすく、身体的・社会的に脆弱なために、犯罪不安をもつことが指摘されてきた。日本でも同様に、女性は男性よりも犯罪不安を感じやすいことが報告されている。たとえば羽生・畑・山岡・芝田・山下・大谷・亀岡・佐々木(2011)は、人の集まるターミナル駅におけるフィールド実験を行った結果、男性と女性とで喚起される犯罪不安の環境的な要因に大きな違いはないが、とくに大学生などの若い世代では、男性よりも女性の方が不安を高く評価する傾向があることを指摘している。

そこで本研究では、これら犯罪不安が喚起される要因の中から、性別、人気の有無、時間帯の3つを取り上げることとした。小野寺・桐生・羽生(2003)によると、①人が多い空間よりも人が少ない空間、②昼間よりも夜間、とくに暗い空間、③男性よりも女性の方が、環境不安が高く喚起されることを指摘している。同じ空間でも、昼間と夜間とで人気の有無も異なると考えられる。そのため、a:昼間も夜間も人気の多い環境、b:昼間は人が多いが、夜間は人気の少ない環境、c:昼間は人が少ないが、夜間は人気の多い環境、d:昼間も夜間も人気の少ない環境を選び、それら同じ環境内での昼間と夜間との犯罪不安の違いを明らかにする。これにより、人気の有無と時間帯との関係をより詳細に検討することができると考えられる。

犯罪不安の研究方法として、その環境の特徴を写真などで呈示して評定を求める方法と、実際に環境の中を移動することで不安要因を確認するフィールド実験とがある。後者の手法は、より生態学的妥当性が高く、質的な要因をも明らかにすることが可能であるが、時間帯や周囲の明るさ、騒音などの要因の統制が難しい。本研究では、同じ場所の異なる時間帯を要因の1つとして、取り上げる3つ以外の要因の影響をできるだけ相殺して統制すること、データ収集の簡便性を考え、前者の手法を用いる。

ところで、これまでの犯罪不安の研究では、その多くが「漠然とした犯罪の被害者になるのではないかという不安」を抱えているものが多い。しかしながら実際には、その環境に特有な犯罪があるように、犯罪の種類によって、不安が喚起される要因は異なると考えられる。

そこで本研究では、漠然とした犯罪全般に対する不安ではなく、代表的な犯罪の種別ごとに犯罪の被害者になるかもしれない不安の程度を測定することとした。対人犯罪の中から、A 傷害

罪などの暴力犯罪 B 恐喝・強盗などの財産犯罪 C 痴漢・露出などのわいせつ罪 D すり・ひったくりなどの窃盗犯罪の4種類を取り上げ、犯罪の種別に喚起される犯罪不安が異なるのかを明らかにすることとした。

まず、予備実験として、それぞれの写真に写った環境に関する人気の有無の評定を求める。人気の有無が異なる環境として、a：昼間も夜間も人気の多い環境、b：昼間は人気が多いが、夜間は人気の少ない環境、c：昼間は人気が少ないが、夜間は人気の多い環境、d：昼間も夜間も人気の少ない環境の4条件の写真を選定する。その後、本実験では、4種の犯罪の種別に犯罪不安の評定を求め、性別、人気の有無、時間帯による犯罪不安の違いを検討する。

2. 予備実験

2.1. 方法

評価者：大学生20名（男6名 女14名、平均年齢21.2歳、SD=0.85）。

写真材料：街の中や住宅街など、さまざまな環境の場所を選定し、同じ場所の昼と夜の写真をデジタルカメラで撮影した。実験で使用した写真は100枚以上の中から選定した、18か所の昼と夜の写真（18×2）の36枚を使用した。使用した写真は表1に示す。

手続き：選定した18枚の写真をランダムに提示した。①写真の場所を知っているか（「はい」か「いいえ」の2件法）、②写真の場所について明るいと感じるか、暗いと感じるか（9：「明るい」～1：「暗い」の9段階評価）、③写真の場所について人気を感じるか感じないか（9：「人気がある」～1：「人気がない」の9段階評価）、について回答を求めたあと、提示された写真について感じたことを自由に記述するように求めた。なお、③については、実際に写真に人が写っているか否かではなく、この空間に人気を感じるか否かであることを評価するように教示した。実験は個別あるいは2、3人の小集団で行った。

2.2. 結果

明るさと人気の評定値の平均値を算出したものを表2に示す。評定値ごとに時間(2)×場所(18)の2要因の分散分析を行い、本実験で用いる写真の選定を行った。

2.2.1. 明るさの評定について

明るさの評定値について分散分析を行った結果、時間の主効果 ($F(1,323)=141.80, p<.001$)、場所の主効果が有意であった ($F(17,323)=28.78, p<.001$)。また、時間と場所の交互作用も有意であった (F

表1 予備実験で用いた写真の一覧

番号	場所	呈示順序	
		(昼)	(夜)
1	千代田区 交番前	18	6
2	千代田区 駅出口1	16	22
3	千代田区 駅出口2	28	8
4	千代田区 繁華街	9	36
5	世田谷区 交番前1	15	23
6	世田谷区 交番前2	26	1
7	世田谷区 歩道橋1	35	4
8	世田谷区 歩道橋2	32	25
9	世田谷区 歩道橋上	27	14
10	世田谷区 倉庫	13	29
11	山形市 駅出口1	30	17
12	山形市 駅出口2	11	2
13	山形市 駅出口3	5	7
14	山形市 繁華街	21	12
15	山形市 住宅街公園	33	20
16	山形市 住宅街道路	19	34
17	山形市 大学中庭	24	10
18	山形市 大学正門前	3	31

表2 予備実験の結果 各写真の明るさと人気の有無の判断の平均値 および、昼と夜の平均の比較

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
	千代田区 交番前	千代田区 駅出口1	千代田区 駅出口2	千代田区 繁華街	世田谷区 交番前1	世田谷区 交番前2	世田谷区 歩道橋1	世田谷区 歩道橋2	世田谷区 歩道橋上	世田谷区 倉庫	山形市 駅出口1	山形市 駅出口2	山形市 駅出口3	山形市 繁華街	山形市 住宅街公園	山形市 住宅街道路	山形市 大学中庭	山形市 大学正門前	
明るさ	昼	7.5	7.1	6.7	7.1	6.1	4.5	7.3	6.5	4.7	6.2	7.0	7.6	5.8	7.0	5.9	6.9	5.5	
	夜	6.3	5.2	7.0	5.9	4.7	4.1	2.1	2.0	2.1	1.6	3.6	6.8	4.3	5.4	2.4	1.4	1.6	1.4
		*	***	n.s.	**	**	n.s.	***	***	***	***	n.s.	***	n.s.	***	***	***	***	***
人気	昼	7.2	7.1	6.7	7.3	4.0	2.8	3.5	4.0	2.4	3.0	7.0	7.0	5.7	5.5	4.0	2.6	3.2	4.9
	夜	7.2	7.2	7.5	6.8	4.1	3.9	2.1	2.0	1.8	1.9	3.5	7.6	6.2	5.9	1.6	1.3	1.5	1.6
		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	***	***	n.s.	**	***	n.s.	n.s.	n.s.	***	**	***	***
本実験			a								b		a		b		c	c	

a: 昼も夜も人気がある

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

b: 昼は人気があるが、夜は人気がない

c: 昼も夜も人気がない

(17,323)=18.89, $p < .001$)。時間と場所の交互作用について単純主効果と多重比較を確認したところ、昼の時 ($F(17,646)=8.18, p < .001$)、夜の時 ($F(17,646)=39.91, p < .001$) とともに場所による効果は有意であった。昼間はほとんど多くの場所で明るいと判断されていたが、6, 9番の写真に対する評定値が中程度で、13, 1, 7番の評定値がとくに高かった。夜間は3, 12, 1番ではとくに明るいと評価されており、16, 18, 17, 9番の場所ではとくに暗いと評価されていた。時間帯による差がなかったのは3, 6, 14番で、それ以外はすべて同じ場所でも昼間の方が明るいと判断されていた。

これらの結果から、駅前や繁華街では昼間も夜間も明るく、夜間でも住宅街や大学内など街灯の少ない空間は暗く評価されており、光量との関係で明るさの判断がなされていることが確かめられた。

2.2.2. 人気の評定について

人気の評定値について分散分析を行った結果、時間の主効果 ($F(1,323)=34.77, p < .001$)、場所の主効果が有意であった ($F(17,323)=63.14, p < .001$)。また、時間と場所の交互作用も有意であった ($F(17,323)=11.39, p < .001$)。時間と場所の交互作用について単純主効果と多重比較を確認したところ、昼の時 ($F(17,646)=30.15, p < .001$)、夜の時 ($F(17,646)=56.07, p < .001$) とともに場所による効果は有意であった。明るさ判断とは異なり、昼間と夜間とでの差が小さかった。昼間最も人気があると評価されていたのは、1, 2, 3, 4, 11, 12番の写真で、このうち11番以外は夜間も同様に人気があると評価されていた。人気がないと評価されていたのは、6, 9, 16, 17番の写真で、これらの場所は夜間も人気がないと評価されていた。

6番の写真は交番の前であるが、日陰が多いことで暗く、また、交番のライトもついていないため、そこに交番があることに気付かないような住宅街の写真となっていた。このため、交番の

ライトがつく夜間のほうが人気があると評価されていたと考えられる。それ以外の場所では、昼間よりも夜間の方が人気があると評価されていた場所はなかった。明るさの評定と同様に、駅前や繁華街では人気があり、とくに夜間の歩道橋や住宅街、公園などの空間では人気がないと評価されていた。

2.2.3. 本実験で使用する写真の選定

本実験では、a：昼も人気があり、夜も人気がある環境、b：昼は人気があり、夜は人気がない環境、c：昼も人気がなく、夜も人気のない環境、d：昼は人気がないが、夜は人気のある環境の4条件を用いる予定でいたが、予備実験の結果、dの条件に当てはまる写真は1枚だけであった。本実験では、人気の有無以外の場所に固有な情報である剰余変数を相殺するために、各環境条件につき2枚以上の場所の写真が必要となる。そこで、dの条件を除く3条件で本実験を行うこととした。

予備実験における明るさおよび人気の評定結果をもとに、aの条件に当てはまるものとして、昼も夜も人気があり、明るい場所である3と12の写真を使用することとした。bの条件に当てはまるものとして、昼は明るくて人気があり、夜は暗くて人気がないと評価されていた11と15の写真を使用することとした。cの条件に当てはまるものとして、昼も夜も人気がなく、暗い場所であり、できるだけ昼夜の値の差の小さいものを選び、16と17の写真を使用することとした。

3. 本実験

3.1 方法

評価者：大学生91名（男54名 女37名）。

要因計画：性別（男・女の2水準）×時間帯（昼・夜の2水準）×人気の有無（予備実験で選定した3水準）の3要因であった。性別以外は被験者内要因である。人気の有無は、a：昼も人気があり、夜も人気がある環境、b：昼は人気があり、夜は人気がない環境、c：昼も人気がなく、夜も人気のない環境の3水準であり、1環境につき、2箇所ずつの写真を使用した（付録参照）。

手続き：時間帯（2水準）×人気の有無（3水準、2箇所ずつ）計12枚の写真を1枚ずつランダムに提示し、この環境で犯罪に遭遇しそうと感じるか、4種類の犯罪別（A 傷害罪などの暴力犯罪 B 恐喝・強盗などの財産犯罪 C 痴漢・露出などのわいせつ罪 D すり・ひったくりなどの窃盗犯罪）に、9:「犯罪に確実に遭遇しそう」～1:「犯罪にまったく遭遇しそうにない」の9段階で評定を求めた。なお、実験は心理学の授業中に集団で行った。

3.2. 結果

各犯罪別に算出した犯罪不安の評定値の平均を、それぞれ図1～4に示す。犯罪の種類別に、犯罪不安の評定値について、性別(2)×時間帯(2)×人気の有無(3)の3要因の分散分析を行った。

3.2.1. 傷害罪などの暴力犯罪

性別(2)×時間帯(2)×人気の有無(3)の分散分析を行ったところ、性別の主効果は有意でなかった($F(1,89)=0.004, n.s.$)が、時間帯の主効果($F(1,89)=223.66, p<.001$)と人気の有無の主効果

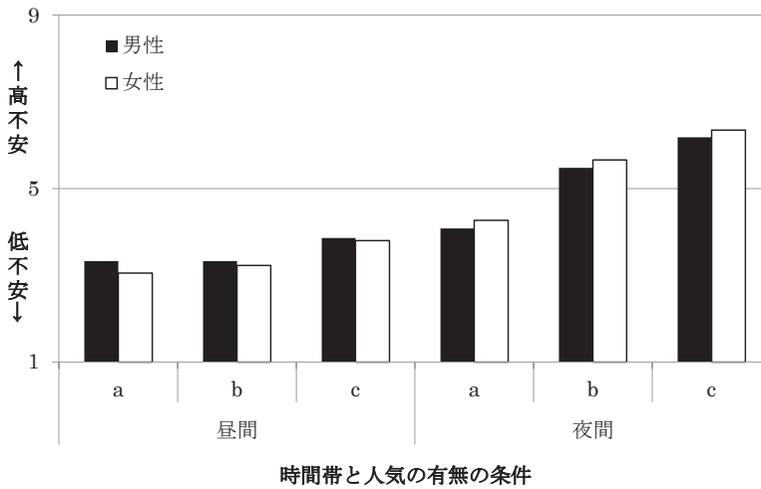


図1 A 暴力犯罪に対する犯罪不安の平均値

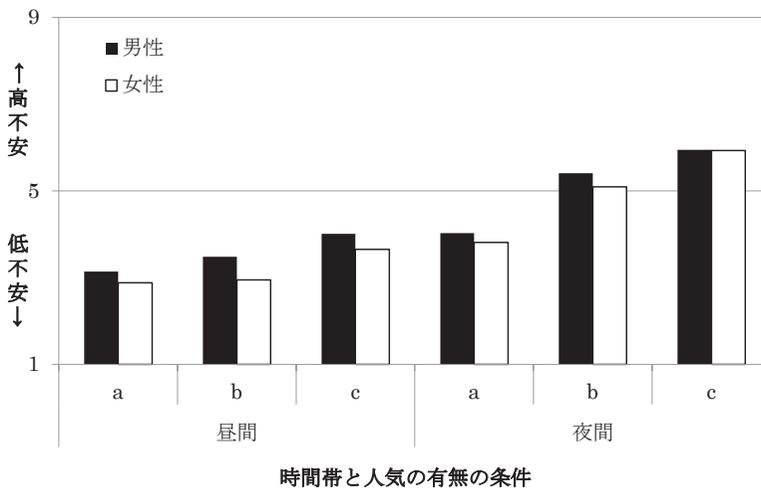


図2 B 財産犯罪に対する犯罪不安の平均値

($F(2,178)=58.24, p<.001$)は有意であった。時間帯については、昼よりも夜の方が、人気の有無については、a(昼・夜人気あり)<b(昼人気あり・夜人気なし)<c(昼・夜人気なし)の順に犯罪不安が高かった。

交互作用は、時間帯と人気の有無の交互作用のみ有意であった($F(2,178)=21.74, p<.001$)。下位検定を確認したところ、昼はa(昼・夜人気あり)=b(昼人気あり・夜人気なし)<c(昼・夜人気なし)であったが、夜はa(昼・夜人気あり)<b(昼人気あり・夜人気なし)<c(昼・夜人気なし)の順に犯罪不安が高かった。

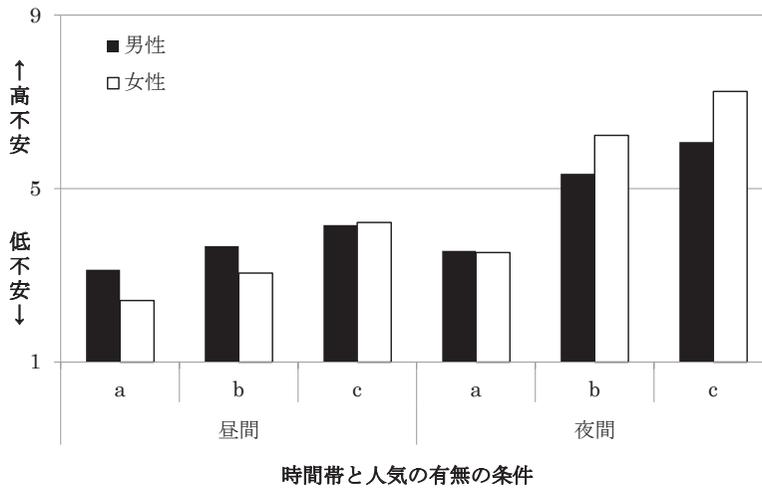


図3 C わいせつ罪に対する犯罪不安の平均値

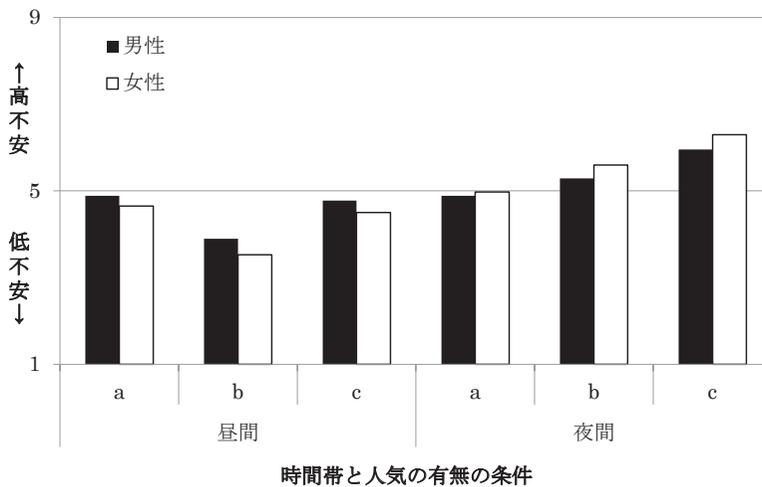


図4 D 窃盗犯罪に対する犯罪不安の平均値

これらのことから、暴力犯罪に対する不安は、男女ともに夜に人気のない空間でとくに不安が高くなることが示された。

3.2.2. 恐喝・強盗などの財産犯罪

性別(2)×時間帯(2)×人気の有無(3)の分散分析を行ったところ、性別の主効果は有意でなかった ($F(1,89)=0.98, n.s.$) が、時間帯の主効果 ($F(1,89)=175.65, p<.001$) と人気の有無の主効果 ($F(2,178)=62.59, p<.001$) は有意であった。時間帯については、昼よりも夜の方が、人気の有無については、a(昼・夜人気あり) < b(昼人気あり・夜人気なし) < c(昼・夜人気なし) の順に犯

罪不安が高かった。

交互作用は、時間帯と人気の有無の交互作用のみ有意であった ($F(2,178)=17.96, p<.001$)。下位検定の結果、昼は $a(\text{昼}\cdot\text{夜人気あり}) = b(\text{昼人気あり}\cdot\text{夜人気なし}) < c(\text{昼}\cdot\text{夜人気なし})$ であったが、夜は $a(\text{昼}\cdot\text{夜人気あり}) < b(\text{昼人気あり}\cdot\text{夜人気なし}) < c(\text{昼}\cdot\text{夜人気なし})$ の順に犯罪不安が高かった。

これらのことから、暴力犯罪と同様に、恐喝などの財産犯罪に対する不安は、男女ともに夜に人気のない空間でとくに不安が高くなることが示された。

3.2.3. 痴漢・露出などのわいせつ罪

性別(2)×時間帯(2)×人気の有無(3)の分散分析を行ったところ、性別の主効果は有意でなかった ($F(1,89)=0.18, n.s.$) が、時間帯の主効果 ($F(1,89)=245.14, p<.001$) と人気の有無の主効果 ($F(2,178)=154.55, p<.001$) は有意であった。時間帯については、昼よりも夜の方が、人気の有無については、 $a(\text{昼}\cdot\text{夜人気あり}) = b(\text{昼人気あり}\cdot\text{夜人気なし}) < c(\text{昼}\cdot\text{夜人気なし})$ の順に犯罪不安が高かった。

性別と時間帯の交互作用が有意であった ($F(1,89)=20.70, p<.001$)。下位検定の結果、昼間は男女差がないが、夜間は女性の方が男性よりも不安が高くなっていた。

性別と人気の有無の交互作用が有意であった ($F(1,89)=7.22, p<.01$)。単純主効果の現れ方に大きな差はなかったが、 $c(\text{昼}\cdot\text{夜人気なし})$ のみ、女性の方が男性より不安が高い傾向にあることが示された。

また、時間帯と人気の有無の交互作用が有意であった ($F(2,178)=33.70, p<.001$)。単純主効果の現れ方に大きな差はなかったが、昼間の方が人気による差が大きいことが示唆された。

これらのことから、わいせつ犯罪に対する不安は他の犯罪にくらべて男性よりも女性の方が不安は高く、とくに夜間にその差が大きくなることが明らかとなった。

3.2.4. すり・ひったくりなどの窃盗犯罪

性別(2)×時間帯(2)×人気の有無(3)の分散分析を行ったところ、性別の主効果は有意でなかった ($F(1,89)=0.07, n.s.$) が、時間帯の主効果 ($F(1,89)=72.22, p<.001$) と人気の有無の主効果 ($F(2,178)=15.41, p<.001$) は有意であった。時間帯については、昼よりも夜の方が、人気の有無については、 $a(\text{昼}\cdot\text{夜人気あり}) = b(\text{昼人気あり}\cdot\text{夜人気なし}) < c(\text{昼}\cdot\text{夜人気なし})$ の順に犯罪不安が高かった。

性別と時間帯の交互作用が有意であった ($F(1,89)=4.18, p<.05$)。単純主効果の現れ方に大きな差はなかったが、女性の方が昼と夜との差が大きくなっていた。

また、時間帯と人気の有無の交互作用が有意であった ($F(2,178)=29.10, p<.001$)。下位検定の結果、昼は $b(\text{昼人気あり}\cdot\text{夜人気なし}) < c(\text{昼}\cdot\text{夜人気なし}) = a(\text{昼}\cdot\text{夜人気あり})$ であったが、夜は $a(\text{昼}\cdot\text{夜人気あり}) < b(\text{昼人気あり}\cdot\text{夜人気なし}) < c(\text{昼}\cdot\text{夜人気なし})$ の順に犯罪不安が高かった。

これらのことから、窃盗犯罪に対する不安は、他の犯罪とは異なり、人気の多い昼間でも高くなることが明らかとなった。

4. 総合考察

本実験では、写真による環境評価を行い、犯罪被害を受けるのではないかという不安を感じる要因を検討した。環境要因として、人気の有無・明るさ（昼・夜という時間帯）・性別に着目した。また、犯罪の種類によって喚起される要因が異なることが予想されるため、単純な犯罪不安を扱うのではなく、暴力犯罪・財産犯罪・わいせつ罪・窃盗犯罪の4つの犯罪の種類別に喚起される不安を測定した。

その結果、すべての犯罪に共通する特徴として、同じ場所の写真であっても、夜の方が昼よりも不安が高くなること、特に夜は人气が少ないと不安が高くなることが示された。これらの点は、先行研究と同様の結果である。

犯罪の種類別に特徴をまとめると、傷害罪などの暴力犯罪と、恐喝・強盗などの財産犯罪では特徴に違いはなかった。身体に危害を受ける危険性のある犯罪では人気の有無と時間帯による影響が大きく、性差による影響はみられなかった。すりやひったくりなどの窃盗犯罪は、昼間の人気の多いときにも増えることが明らかとなった。昼間の人気の多い環境は、窃盗犯罪以外の犯罪では最も犯罪不安が喚起されない環境条件である。性差による影響が得られたのは痴漢・露出などのわいせつ罪のみであった。昼間や人気のある空間では男女差はないものの、夜間の人気のない空間では、女性の不安は男性よりも明らかに高いことが示された。

これらの結果から、犯罪不安を感じる要因の特徴について検討する。

4.1. 性別による犯罪不安の違い

先行研究では一般的に男性よりも女性の方が犯罪被害に遭う不安を感じていることが指摘されているが、その多くはわいせつ罪を想定していることが示された。たとえば、社会的属性による犯罪リスク知覚の規定要因を日米で比較している阪口(2008)によると、アメリカでは犯罪のリスク知覚において年齢の違いはなく、女性の方が男性よりも2倍以上犯罪の被害者になるリスクを感じている。一方で日本では、20代未満の年齢では女性の方が犯罪被害のリスクを感じているのに対して、年齢が上がると性差がない。この理由として阪口は、若年の女性が感じる不安の背景に性的犯罪への不安があることを挙げている。本研究の結果は、この阪口の理論を支持するものであるといえる。他の犯罪に比べると明らかに女性が被害に遭うことが多い犯罪であり、アメリカ以上に日本ではこの性的犯罪への不安が全般的な犯罪不安を形成していることが示唆される。

ただし、昼間や人気の多い空間ではわいせつ罪でも男女差はなかった。女性は犯罪不安を感じる場所について、逃げるができる場所かどうかにかかわらずに敏感である(小野寺ら, 2003)ことが指摘されている。本研究では逃げる場所の有無については検討していないが、とくに女性の犯罪不安が高かった写真は、夜間の人気のない環境であった。これらの写真は、その空間の延長線が暗闇になっており、何があるのかがまったくわからない環境である。不審者が隠れている可能性と同様に、逃げる場所があるのかわからないのかもわからない。そのため、男性よりも不安がとくに高まった可能性がある。

以上のことから、女性の犯罪不安が高い理由として性的犯罪に対する不安があり、それ以外の犯罪については、男女差で明確な差はないことが明らかとなった。性的犯罪以外の防犯を考えるときには、男性の被害者と女性の被害者と双方の可能性を視野に入れて対策を行う必要があるだろう。

4.2. 人気の有無による犯罪不安の違い

これまでの研究では、人気があると犯罪不安が少なくなることが報告されている。しかしながら本研究によると、駅前の人気の多い昼間でも、すりやひったくりなどの窃盗犯罪の不安は低くはない。これは、すりやひったくりはどちらかと言うと人ごみの中で起きることが多いことと関係しており、多くの人が、人気のある空間でもある種の犯罪に遭う危険性を危惧していることを示唆している。多くの場合、人気があることで犯罪発生の抑制になると考えられているが、人ごみのなかではすりが行われても気が付けない可能性や、ひったくり犯がまわりの群衆に紛れて逃げる可能性があるため、窃盗犯罪では人気の有無は犯罪発生の抑制にはならないと考えられる。すなわち、人気があるからといって安心するのではなく、人気の多い空間ではすりなどの犯罪に遭わないような防犯対策を心がける必要がある。

周囲の人々がどのような役割となるのかに着目した羽生ら(2011)は、人の多く集まるターミナル駅を用いてフィールド実験を行っているが、人気の有無の中でも「助けを呼ぶことができる人」が周囲にいない場合は、犯罪不安が増すことを報告している。さらに本実験の結果から、人気があっても、その人々の存在が窃盗犯罪を生み出す環境を生み出し、人気の有無が犯罪不安の原因になる場合があることが明らかとなった。

4.3. 本実験の問題点と可能性

本実験では、人気の有無と明るさの状況を予備実験で確認した写真を用いた。実際の状況と同様に、これらの写真は人気の有無だけではなく、犯人(あるいは評定者自身)が隠れられる空間の状況なども異なっていた。これら様々な条件が交絡しないよう、実験的に操作した空間の写真を用いることが提案される。また、本実験では得ることのできなかった「昼間は人気がないが、夜間は人気のある空間」の写真を増やしたりする必要もある。これらの条件の整備に不備があったものの、生態学的妥当性の点から考えると、「昼間は人気がないが、夜間は人気のある空間」は少ないため、十分な条件であったともいえる。

このような問題点があるものの、本研究から、犯罪不安はその犯罪がおきやすい環境的要因と関係して生じられることが明らかとなった。すなわち、先行研究が指摘してきたように、漠然とした犯罪不安は明るさや人気の有無、性別などによって規定されるが、具体的な犯罪の被害者となるリスクの知覚は、実際に犯罪が起きる環境的要因に従っている。われわれの犯罪不安は漠然としたものではなく、明らかな理由に基づいて生じていることを示しており、さらに犯罪不安が喚起される要因を明らかにすることで、犯罪に遭いやすい環境を特定し、環境の面から犯罪予防の可能性が高いことを示している。

謝辞

本論文は、平成 26 年度人文学部心理学科卒業論文「犯罪不安喚起とその要因について（本間由利恵著）」を大幅に加筆修正したものである。実験に協力した参加者の学生に謝意を記す。

引用文献

- 羽生和紀・畑倫子・山岡佳子・芝田征司・山下雅子・大谷華・亀岡聖朗・佐々木心彩 (2011). ターミナル駅における犯罪不安物理的特性の影響. 人間・環境学会誌, **14(1)**, 1-10.
- Kelling, G.L. & Coles, C. M. (1996). *Fixing broken windows*. James Q. Wilson (ケリング, G. L.・コールズ, C. M. 小宮信夫 (監訳) (2004). 割れ窓理論による犯罪防止—コミュニティの安全をどう確保するか 文化書房博文社).
- 本柳亨 (2011). 犯罪統制と排除:犯罪機会論の台頭. 社会学論集, **18**, 33-48.
- 小野寺理江・桐生正幸・羽生和紀 (2003). 犯罪不安喚起に関わる環境要因の検討：大学キャンパスを用いたフィールド実験. 人間・環境学会誌, **8(2)**, 11-20.
- 阪口祐介 (2008). 犯罪リスク知覚の規定構造：国際比較からみる日本の特殊性. 社会学評論, **59(3)**, 462-477.

(たかしま みどり／心理学)

(ほんま ゆりえ／心理学)

付録資料 本実験で用いた写真の一例

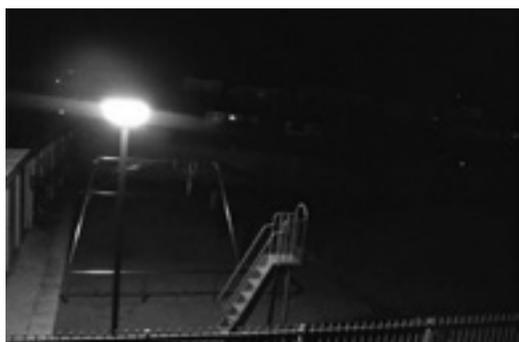
条件a (昼人気有・夜人気有)・夜間



条件a (昼人気有・夜人気有)・昼間



条件b (昼人気有・夜人気無)・夜間



条件b (昼人気有・夜人気無)・昼間



条件c (昼人気無・夜人気無)・夜間



条件c (昼人気無・夜人気無)・昼間

